

アイヌ文化にであう2—樹皮からつくる着物

参照資料

『アイヌ生活文化再現マニュアル：縫う【チェブケリ・ユクケリ・トッカリケリ】』

『アイヌ文化の基礎知識』
p.54～p.73、p.76～p.80、
p.100～p.116、p.138～
p.169

『アイヌ民族：歴史と現在 小学生用』 p.8～p.11、p.14～p.15、p.42～p.43

『アイヌ民族：歴史と現在 中学生用』 p.20、p.32

『アコロイタク』

『アイヌの人たちとともに』
p.14～p.15、p.18～p.23

『アイヌ料理入門』

『アイヌ語で自然かんさつ図鑑』 p.59、p.61



写真の靴や衣服はなに（どんな素材）からできているでしょう？考えてみてください。これらの動物はアイヌの人々にとって、肉は食料、毛皮は衣服などの民具になりました。

① エゾシカ

北海道に生息するニホンジカで、本州以南のシカより大型です。シカはアイヌ語でユクといいます。これは冬毛の毛皮です。冬毛は夏毛より太く、長くなっているため、保温性が高く、靴や衣服を作るのに適しています。冬に備えて脂肪を蓄えるため食用にも適しており、シカを獲るのは主に秋から冬にかけての季節でした。

② ヒグマ

日本では北海道と千島に生息しており、本州などのツキノワグマよりも大型です。アイヌ語では「キムンカムイ（山の神）」などと呼ばれ、動物の中でも特に尊敬されていました。毛皮は火打石などを入れるかばんや衣類を作る素材として、肉や胆のうは食べ物や薬として利用されました。しかし、ヒグマの狩猟はふだんの生活のためではなく、信仰の対象や交易品として重視されていました。

③ ゴマフアザラシ

北海道に生息するアザラシの一種です。流氷上で出産するため、オホーツク海岸域で冬によく見られます。アザラシはアイヌ語で「トゥカラ」などと呼ばれ、後から北海道に入ってきた人たちの間でも「トッカリ」という言葉で、今も使われています。ゴマフアザラシの毛皮は、特にサハリンやオホーツク海側の地域で、服や靴などに使われました。肉や脂も利用されました。

④ サケ

シロザケはアイヌ語で「カムイチェブ（神の魚）」といいます。また、「シペ（本当の食べ物）」とも呼ばれ、身は食用、皮は靴などに利用し、捨てる部分がなく大切にされてきました。川をのぼってきたサケは海にいるときよりも脂肪が落ちて、色も変わっています。